



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学校教育における合唱指導理論の構築：声の相似現象に見る模倣行動を起点として(論文要旨)
Author(s)	戸谷,登貴子
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	http://hdl.handle.net/2309/149517
Publisher	
Rights	

氏 名 : 戸谷 登貴子
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 310 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 3 月 16 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 学校教育における合唱指導理論の構築
一声の相似現象に見る模倣行動を起点として—
論文審査委員 : (主査) 教授 小川 昌文
(副査) 教授 横山 和彦 教授 蛭多 令子
教授 有元 典文 教授 本多 佐保美

学位論文要旨

我が国の学校教育において、合唱は大変盛んに行われている。授業内外の合唱活動は、学校文化を成しているとも言える。しかしその合唱は、戦後の学校教育で確立した独特のスタイル、方法によって実践されており、社会における芸術文化としての合唱とは、一線を画すものである。その状況には、授業の合唱の在り方が大きく関わっていると考えられる。そこで本論文は、小・中学校合わせた義務教育 9 年間での合唱授業に対し、授業の本質である「学び」が、合唱授業においては何に主眼を置き、どのようなねらいで行われるべきなのか、合唱授業という集団学習の特質を考慮し、理論に裏打ちされた実践からの指導法を提案していくことから、理論構築の必要性を考察し、学校現場に合唱授業の再考を示唆することを目的とした。

序章では、合唱授業の問題点を、(1)歌い合わせることを中心とした合唱授業、(2)合唱授業における学びとは何か、の 2 点に据え、その背景を合唱教育の歴史、授業の問題点、教科の本質、学習システム、授業の特性、学校音楽の 6 つの視点から挙げ、先行研究を基とし、現状の懸念と指摘から問題提議を行った。

第 1 章では、合唱に必要な能力について、現行の学習指導要領で記載されている内容だけでは合唱の習得は難しいと考え、現在の音楽授業の合唱学習に欠如している観点として(1)音程感覚、(2)倍音、(3)聴感、(4)音楽構造の分析、について能力育成の必要性を論及した。またこれらの能力を子どもたちが身につけるためには、発達段階を考慮する必要がある。そこで、第 2 章では、特に身体的発達が影響する発声に関する項目を中心に、先行研究を基に指導の方向性を明確にした。

本研究の特徴は、歌唱学習の過程で共通にみられる「相似現象」を誘発する模倣行動に着目して客観的に分析を試み、指導実践につなげた点である。

第 3 章では、この相似現象と学習の関わりを音楽教育領域のみならず、音響工学、教育心理学の領域からも分析し、そこから、学習の基礎と言える模倣行動が声の相似にも影響していること

を明らかにした。研究プロセスは、まず模倣のメカニズムを明らかにし、音声生成の先行研究などを基にして、授業で起こる相似現象解明に向け、(1)歌唱の相似現象に最も影響する要因は、音色が似ていることなのではないか。(2)集団歌唱においては、模倣学習することにより、母音、音高、時間経過、強弱の4つの要素で声が収斂され、相似現象がおこるのではないか。という2つの仮説を立てた。そこから授業の模倣学習場面を客観的に観察、歌唱学習の音声分析を行い、模倣学習の特性と声質の相似要因を明らかにした。その結果は、相似の印象を与え最大の要因と考えられていた指導者と学習者の声の音色は、それほど似たものではなかった。むしろ、音高、さらには音価や音の立ち上がりであるフレーズの歌い出しの方が近似値であり、音声波形の似たものになっていた。また、集団歌唱の中では、学習過程で声が収斂され、同期される。それには、音楽経験や音楽学習が深く関わっていることがわかった。このことは、歌唱学習における模倣学習の作用を裏付けるものであり、教師の模倣に対する認識の重要性が明らかになった。

第4章では、第1章、第2章で提示した合唱理論を、第3章で明らかになった模倣学習のメカニズムを踏まえて、実際の授業で実践していくための指導理論を構築した。さらに系統性のある指導体系のコダーイ・メソッドから示唆を得て、学校現場における理論と実践の融合について論考した。

第5章では、第3章で構築した理論に基づく具体的な指導法を提示した。各指実践指導に第1章、第2章で提示したどの理論が基盤になっているのか、そして第3章で解明した模倣理論がどのようにかかわるのか、それらの連携と指導目的を明確にし、実践内容を示した。指導実践内容は、授業における有効性・有用性を見るために、実際の音楽科授業、小・中学校音楽科研修会と筆者が指導をしている少年少女合唱団で実施した。また、研修会に参加した音楽科教員へ研修後の追跡調査を行い、理論が現場実践につながるための課題等も明らかにした。これらの検証から、授業において、合唱を歌うために必要な音楽学習と有効・有用な指導を割り出した。

最終章の結論では、合唱理論の必要性とそれを現場実践していくための指導理論、集団における現象を踏まえた指導の重要性をまとめた。合唱授業の向上には、教師の認識の必要性と合唱に対する視野の広がりと変革があって実現すること、そして今後の音楽教育の発展には、研究と現場実践の間のコネクティブな研究発信が必要であることを述べた。